

神社坂

斎藤 望

海に面する小さな街
漁業の街であり 港がある
港からまもなく坂の地形
坂の途中には道路が横切り交差点があり 様々な道の分岐点がある
坂の途中で人と出逢う
無言ですれ違う人もいれば 親しく会釈をする人 多くの出逢いがある
坂は徐々に勾配が強くなり やがて石段の前にたどり着く
見上げると 石段が六十段程連なった頂上にお社が見える
そのお社の地点が坂の頂きであるのだ
石段に足を踏み入れる 一歩 一歩
そして 石段を登り切り お社の前に立つ
振り返ると 港が見え 今まで登ってきた道を見渡す事が出来る
まるで人生の坂道そのもののように――
街ではこの坂を 「神社坂」と呼んでいる

夏の日差しの降り注ぐ、ある日の午後、一組の老いた男女が神社の石段の前に立っていた。

今日は、街のお祭りの最終日であり、花火大会の日だ。

男は女に手を差しのべた。

「これから、この石段を二人で登ろう」

「―――。まあいいでしょう。お付き合いしましょう」

二人は石段を踏みしめた。

女が尋ねた。

「——。今日はいったいどうしたの？」

「特別な理由はないのだけれど、思い出す事があってね——」

「—————」

男は、また手を差しのべた。

「手をつないで登ろう」

「—————」

一組の老いた男女は手をつなぎ神社の石段を登り始めた。

女は、男の顔を見つめながら語った。

「こうして手をつないでいると、私達の小さい頃を思い出しますね」

「そうだね。あの頃は、歳をとってからも一緒に手をつなぎ歩くとは考えもしなかったな」

「私もよ。——でも、小さい頃だけではなかったわよ」

「そ、そうだった。あの頃だけではなかった——」

二人は、見つめ合いながら石段を登り続けた。

そこに、上から二十代と思われる若いカップルが腕を組み、寄り添いながら降りてきた。

突然、女は男から手を離した。

「どうしたのだ？」

「ちょっと思い出した事があって——」

「——。まあいいだろう」

二人は離れて石段を登り始めた。

やがて、石段の中間点の小さな広場に辿り着いていた。

そこで、二人は更に離れ、背中合わせのベンチに座った。

「—————」

会話が途切れ、何かを思い出しているように、共にうつむき沈黙したままとなったのである。

＊

小学校から高校まで、仲の良いクラスメイトだった信一と由美。

手をつなぎ小学校に通った事もある。

中学生の時、放課後、二人でよく喫茶店に行き会話を弾ませ、試験の前には互いの家を訪れ、一緒に勉強をした日も多かった。

ノートを照らし合わせながら、いつの間にか二人の距離は接近し、気がつくと互いの頬に息のかかるところまで近づいていた事もあった。

高校三年生のある夏の日、花火大会の夜。

二人は、大学の合格祈願の為、神社の石段を登った。

お社の前に並ぶ鈴を一緒に鳴らし祈った後、信一と由美はお互いの顔を見た。

他に誰もいない境内、花火の灯りに若い二人の顔が浮き上がる。

信一は、極、自然な心境となり、由美の顔に唇を寄せ、キスをしてしまったのである。

突然、由美が我に返り、「信一くん、まだ駄目だったのよ」と言い、体を離し、足早に石段を下りていった。

残された信一は、「由美ちゃんに悪い事をしてしまった」と思いこみ、たちすくんでいた。

信一も由美も心中は複雑であった。共に「恋心」というものを意識していない内に、お互い初めてのキスを交わしてしまったのだ。

その後、学校で顔を合わせても、何かぎこちなく、二人はほとんど会話を交わさなくなってしまうていた。

冬の北海道。

雪が静かに舞い落ちる駅のプラットホーム。

由美が旅立つ日だった。

紺谷信一と松永由美は、高校を卒業し故郷を離れ、これから大学に進学する十代の若者であった。

由美は東京都内の大学に進み、信一は福島県の大学だった。

会おうとすれば会えない距離ではなかったが、頻繁に顔を合わせる機会はほとんどない場所である。

他の友人達は由美と会話し、別れと旅立ちの想いを募らせている。

信一は、少し距離をおき、由美の姿を見つめていた。

列車が動き出した。

窓を開け、皆と会話を弾ませていた由美の視線は信一に向けられた。

信一は黙って由美の目を見つめた。

列車の動きと共に、二人の距離は離れていく。

やがてお互いの姿が見えなくなっていった。

プラットフォームに残された信一は、由美の姿を脳裡に焼き付け、数日後、自分も由美の後を追うように旅立つ日を心待ちにしていたのであった。

信一が旅立つ日。

彼の父が語った。

「信一、お前がこの街を離れ、遠いところで勉学に励むことは大変良いことだ。ただし、必ずこの街に帰ってきて我が家の家業を継いでくれよ」

彼は、複雑な気持ちで父の願いを聞いていた。そして応えた。

「俺は、勉学の為に旅立つ。しかし、その先に何があるかわからない——ご免。約束はできない」

父は複雑な表情で信一を見つめていた。

紺谷信一の新しい学園生活が始まった。

故郷の小さな街よりも、すれ違う人の数や歩き回る場所も遙かに多い。

信一は世の中の広さを実感し、自分の視野が開けた想いが嬉しく、大学のある街での生活に励んでいた。だが、由美の暮らしている場所とは、見知らぬ多くの人混みが厚い壁と感じられ、彼女との距離が遠くに感じていた。

由美の学園生活が気になっていた。

——彼女は新しい環境でしっかりと生活をしているのだろうか。——もしかして、彼氏がもうできているのかもしれない。

大学二年生の夏休み。

信一は二十歳となっており、帰省してきていた。

ある朝、共に帰省してきている級友であり、親友とも言える森田竜司から電話がかかってきた。

「信一、元気か。ところで今日ドライブに行かないか。俺とお前と、真田範子、それに松永由美だ」

信一は、メンバーに由美の名前があったので即答した。

「よし、行こう！」

四人のドライブ。話が弾む。由美の明るい声が信一の脳裡に強く鳴り響く。

目的地の砂浜で四人は車から降り歩いた。

夏の海辺。暑い日差しと磯の香りが皆を包み込む。

信一が砂浜に座りたたずんでいると、由美が来て彼の横に座った。

素肌の腕と腕が触れあう。彼女の体温が伝わってくる。

信一は、あの高校生の時の初めてのキスの事を、由美は、今更、さほど気にしていないのでは、と思った。

由美が語った。

「信一くん、ところで彼女はできたの？」

信一は声を詰まらせたが、何とか言葉を振り絞った。

「いいや、まだなのだよ。俺って女性から人気のない男なのかな」

「そうかしら、私はそのようには思えないけれど——」

そこに真田範子が声をかけてきた。

「あらあ、信一くん、由美ちゃん、二人とも何かお似合いね。私が写真を撮ってあげるわ」

範子の言葉に、信一と由美はポーズをとった。

範子が、「せっかくなのだから二人とも、もう少し近づきなさいよ」と言う。

——信一は、思い切って、由美に「腕を組もうか」と言ってみた。

由美も、「はい」と一つ返事で、二人は、素肌の腕を強く絡み合わせポーズをとり、一緒に写真を撮ったのだった。

信一は、無性に嬉しかった。

そこに森田がやって来た。「おおい、このお菓子、皆で食べようぜ」

彼は、信一とは反対側の由美の隣に座り込んだ。早速、話が始まる。

信一は、もう少し由美と二人だけで腕を組んで話がしたかったが、途切れてしまった。

四人は、それぞれ楽しい時を過ごし、砂浜を離れ、家路についたのだった。

翌日、信一は神社坂の手前で立ち止まった。

下から見上げると坂の頂上までかなりの距離があるように見える。

彼は坂を登り始めた。——途中で、後ろから女性の声が聞こえた。

「信一くん」

心を揺さぶるような声——松永由美だ！

「昨日は楽しかったわね」

「うん、楽しかったね。でも夏休みもみじかいね」

「そうね、私達、学園生活が終わると社会人となり、大人として歩まなくてはならないのね」

由美は坂の上を見つめた。そして話を続けた。

「この坂って、まるで人生の坂のようね。私達これからどのようにして歩むのかしら」

「う～ん、それは僕にもわからないな」

「この坂、これから勾配が強くなり神社の石段に辿り着くわね」

「そ、その通りだね」

「もしかして、私達並んで神社の石段を登るかも——」

信一は、彼女の言葉に驚いた。そして、由美の顔を見つめた。

今まで少女だと思っていたが、彼女も年頃の女性となっているのだ。そういえば、顔も大人っぽくなっている。化粧の香りもする——綺麗になった。

彼は、この時、幼馴染みの彼女から「女」というものを強く意識したのだった。

二人は話しながら、いつの間にか並んで坂を登っていた。

だが、由美は、用事があるらしく、神社の石段の前で違う道へ方向を変え歩き始めた。

信一は、「僕はこれから一人で石段を登ってみるよ」と言って、また歩き始め、由美に背を向けた時、再び後ろから声が聞こえた。

「また会いましょうね——」

信一は、この時の彼女の言葉と表情に、吸い込まれるような心が沸き上がるのを自覚した。そして、笑顔で彼女に手を振ったのだった。——由美の表情が眩しく目に映った。

夜、布団の中で信一は考えていた。

由美の声、素肌のぬくもりが強く染みついている。

彼女を想う気持ちが急激に膨らんでいる。

そして、彼の心に一つの言葉がやっと浮かんだのだった。——由美が好きだ。

みじかい夏が過ぎ、信一達は帰省の期間が終わり、それぞれが学ぶ街に離れていく。

彼は、結局、由美に心を打ち明けられずに暑い時が過ぎてしまっていた。

大学のある街に戻った信一は、何故か胸の重い秋を過ごした。

この時の信一には、彼女に心を打ち明ける勇気がどうしても振り絞れなかったのである。

木枯らしが舞い落ち、雪が舞い降る季節。

大学の冬休み。信一は故郷に帰省してきた。

友人に聞くと、何故か由美は帰省して来ない。という事だった。

信一の胸の重みは益々強くなる。

森田が帰省してきていた。

信一と森田は、神社坂の下の喫茶店で会う事となった。

約束の時間。信一が店のドアを開けると、森田は既に来ていた。

友人同士の会話が始まった。そして、信一は驚愕の言葉を聞かされる事となる。

「信一よ、俺、実は由美が好きでな、夏休みの終わる頃、彼女に告白したのだ」

「—————」

信一は無言で彼の話の聞き続けた。

「由美の返事はな。彼女は既に意中の男性がいるとの事だったのだ。俺は残念だったが、彼女を諦めるしかなかったのさ」

「—————」

信一は、まだ言葉が出ない。

それに、今の森田の話は、もっと深刻なものだったのだ。

——由美に既に好きな男が存在していたとは。

彼は、森田の複雑な表情を見つめ、自分の胸中を誰にも話さず封印せざるを得なかった。

そして、冬休みの終わり頃、由美の女友達の真田範子から更なる話しを聞かされた。

「紺谷くん、由美ちゃんの相手はね、同じ大学で学ぶ、東京の会社役員の息子さんで、前から交際を迫られていたのだけれど、彼女はためらっていたらしいの。でも、結局、交際する事となったのよ。———去年の秋に」

信一にとって、胸に突き刺さるような言葉だった。

彼は、何気ないふりをして、「なるほど、それで冬休みに帰省して来なかったのか」と応えるしかなかった。

白い季節、雪が降り積もり続けるように、信一の心は更に重くなっていたのだった。

歳月は流れる。

皆、大学を卒業する年齢となり、社会に旅立っていく。

信一は、東京近郊の家業と関連性のある商社に勤務する事に決まっていた。

森田と真田範子は、遠く離れた街の会社だ。

由美は、東京の中心部のオフィス街にある旅行会社に勤務する事になったと聞いた。

あれから彼女とは顔を合わせていない。

彼は、由美が距離的にかなり近くなったが、その存在は、更に遠くに離れた想いがしていた。

社会人となり、信一は新米社員として、仕事に没頭する日々を過ごしていた。

彼は、学生時代は、結局、特定の交際相手となる女性はできなかった。

そして、社会人となってからも、その気配はない。

何が足りないか自分ではよくわからない。ただ、知人からは「お前は女性に対して積極性がない」と指摘されていた。

ある年、信一は、故郷に帰省してきていた。

父に聞かれた。

「信一よ、この街に帰ってきて家業を継げないのか」

母にも言われた。

「お前が帰ってきて、親子で暮らすのが楽しみなのよ」

信一は返答できなかった。

——自分は、将来、都会で暮らすのだろうか。それとも、両親のいる故郷に帰ってくるのだろうか。

彼は、自分の将来の道を決める日が徐々に近づいている事を予感していた。

紺谷信一の商社勤務は続く。

相変わらず、女性に奥手の信一であったが、彼に積極的に接近してくる存在が現れる。

職場の同僚である橋田麻理子である。

二つ年下で、勤務して間もなく、東京出身で横浜の大学を卒業している女性だ。

彼女とは、新人歓迎コンパで同席した時に、「紺谷さんのような人と、私、お付き合いをしたいわ」と話をされていた。

ある日、信一は溜まっている仕事の処理で、夜遅くまで机に向かっていた。

そこに彼女からコーヒーとお菓子が差し出されたのである。

信一は、麻理子の顔を見つめた。

「親切にありがとう。嬉しいよ」

「紺谷さん、私は新人でまともに仕事が出来ません。今日も自分の仕事の要領が悪い為に、こんなに遅くまで残らなければならないのです。このような私が先輩に対して役立てるのは、この程度の事しかないのです」

信一は、彼女の素直な対応に好感を抱いた。

数日後、信一は彼女のアパートを訪ねる事となる。

麻理子は丸テーブルに座る信一にコーヒーとお菓子を差し出し、彼の隣りに座った。

「信一さん、私、学生時代にとても好きな人がいたのです。でも、彼は、卒業と同時に遠く離れた郷里に帰ってしまい、その後、連絡もなくなってしまったの。その彼と信一さんの面影がとてもよく似ていて——。ご免なさい。余計な事を話してしまったわね」

彼女は、話しながら信一の胸に顔を埋めてきた。

信一は、かつて由美に、突然、キスをしてしまった場面を思い出し、どうしてよいのかわからなくなっていた。

すると、麻理子の方から信一の顔に唇を近づけ、キスをしてきたのである。

女性に対して、奥手がすっかりと染みついていた信一にとって、彼女から積極的になってくれた事に、今まで経験した事のない幸福感が湧き出ていたのだった。

そして、当然の成り行きのように、二人は男と女としての交際を始めていたのである。

紺谷信一は、都会に来て良かった。と安堵の心を抱き、田舎を離れた生活に充実感を見出していた。

二年後の正月、信一は故郷に帰省していた。

かつての友人達は、もうほとんど帰省してきていなかった。皆、それぞれの街での生活に明け暮れ、正月でも故郷に帰る余裕がないのだろう。

その中で、真田範子が帰省しているのがわかった。

彼女と会うと、当然、由美の近況も聞かされる事となる。辛い思いをするかもしれない。だが、他の旧友達と会う機会もほとんどなくなった今、寂しさもあり、範子に連絡してみ

た。

彼女からは嬉しそうな口調で「是非、会いましょう」という言葉が帰ってきた。

範子と会う日となった。場所は、以前、竜司と会った喫茶店だ。

信一がドアを開けると、彼女はもう来ていた。しかも、竜司と話をしたあの席に。

「範子、久しぶり」

「紺谷くんも元気で過ごしている？」

「まあ、何とかね」

彼女と旧友としての会話が始まっていた。ある程度、話しが進んだ後、彼女は、信一に問いかけてきた。

「ところで、私、以前から紺谷くんに聞いてみたい事があったのだけれど——」

「何のこと？」

「由美ちゃんの事よ」

「——」

「紺谷くん、由美ちゃんの返事はどうだったの？」

「??? どういう事なのだ」

「あら、もしかして——彼女はね。実は紺谷くんが好きだったのよ。由美ちゃんって、男の人に対して積極的になれない女で、私に気持ちを伝えて欲しいと相談されたのだけれど、私は、その内、紺谷くんから告白されるわよ。と応えたの」

「——」

「あらあ、何も言わなかったの。それで由美ちゃんは、都会で新しい相手と交際を始めたのね。——秋の日に」

信一は顔面蒼白となった思いだった。

範子は、信一の表情から悟った。

「紺谷くん、私の思っていた通り、由美ちゃんが好きだったみたいね。——あなた、お馬鹿さんね」

信一は、愕然とした気持ちの動悸が治まらない。——信一は自分の由美によせる心の深さに気がついた。そして、大事な存在は手の届かないものとなって、その重さが明確になるという事も自覚した。

彼は言葉を探し、応えた。

「範子、ありがとう。僕は、あの夏の日、自分は由美を幼馴染みの存在としてだけでなく、大人の女性としても好きなのだと、はっきりとわかっていたのだ。しかし、今ではもう遅い。自分の男としての勇気の足りなさを痛感したよ」

「そうね、残念だけれど仕方がないものね。これから紺谷くんも良い相手を見つけ、皆が幸福になりましょうね——あっ、それから、あの夏の日、私が撮った信一くんと由美ちゃんの二人一緒の写真、まだ渡していなかったわね。はいどうぞ」

信一は、その写真の中の自分と由美が、夢の世界のように見えた。

そして、写真を大事に胸ポケットにしまいこんだのだった。

外に出た信一には、白い雪が、以前にも増して重く降りかかっていた。

東京に帰った紺谷信一は、橋田麻理子との交際を続けた。

会社では、明るく話し合い、仕事が終わると、どちらかのアパートに行き、夜遅くまで語り合う。

信一にとって、由美の存在を忘れる程、幸福感が湧いていた。

社内では、二人がもしかして結婚するかも、と囁かれていた。

ある日、信一と麻理子は会社の用事で、一緒に都内の取引先に出向く事があった。

目的地に向かう途中、彼は知人から聞いていた、あの松永由美が勤めているという旅行会社の近くを通る事になるのに気がついた。

——麻理子と共に、由美のいる場所の近くを歩く。

信一は、形容できない複雑な心境となっていた。

由美が努めていると聞いている建物の前の交差点を渡る時、彼は「由美に会ってみたい」という気持ちが膨らんでいるを自覚していた。

だが、横にいるのは、現在、交際中の麻理子なのだ。とても由美に会う状況ではない。

信一は、麻理子と連れ添いながら、由美のいる方向を何度も振り向いていた。

二人の会社の用事が終わった。腕を組みながら連れ添う信一と麻理子。

帰り道。また由美の勤める場所の近くにやって来た。

交差点を二人は渡った。

麻理子の顔を見つめ、また前を見た信一は驚愕の心境となる。

正面から歩いてくる女性——まぎれもない。見間違えるはずもない。あの松永由美だ！

彼は、麻理子から手を離した。

しかし、由美は既に気づいていた様子だ。

信一は麻理子と腕を組み歩く姿を由美に見られてしまった。

由美と、信一と麻理子は歩きながら徐々に接近する。もう避けられない。

彼は、由美に何と話しをすればよいのか困惑していた。

由美は信一と麻理子の二人を避けようとはせずに近づいてきた。そして、信一に言葉をかけてきた。

「信一くん、久しぶりね」

「——久しぶりだね、由美」

その場で立ち止まり話しが始まる。

「信一くん、お互い、都会での生活も長くなってきたわね。ところで、信一くんは、故郷に帰るのではないかと、昔の仲間達が噂をしていたけれど、本当なの？」

「う～ん、まだはっきりとは言えないのだが——もしかしてそうなるかもしれない」

「あら、信一くん、はっきりしていないなどと言って、実は帰るのね」

「由美、どうしてそのような事が断言できるのだ」

「何を言っているの。私達は同郷で同学年の、物心がついた時から知り合いの仲なのよ。信一くんの考えは、長年の付き合いの勘のようなもので、他の人達よりはわかるつもりよ」

「そうか、由美には、そう思えるのか」

——由美は、次に麻理子を見つめた。

信一は、また困惑する——勘の鋭い由美が、自分と麻理子の様子に気がついているのは間違いないだろう。

信一は、更に、もうひとつ気がつく——自分と由美の会話を横で聞いている麻理子の表情も複雑になっているのだ。

彼は、混乱した想いで、由美に麻理子を紹介した。

「由美、こちらは俺の会社の同僚で橋田麻理子さんだよ。今日は、この近くの取引先の会社への用事で二人で来ていた訳だよ」

由美が口を開いた。

「初めまして、私は信一くんと幼馴染みの松永由美です」

麻理子も由美をじっと見つめている。

信一は、今度は麻理子に由美を紹介した。

「麻理子さん、こちらは、俺の故郷の幼馴染みの松永由美だよ。彼女は、現在、東京で勤務しているね。ここで偶然に会ったのだよ」

「こんにちは、橋田と言います」

麻理子の応答が素っ気ない。

信一は、由美、そして麻理子、二人の様子に、困惑は益々深まる——この場で自分はどうすればよいのだろうか。

由美は、信一と麻理子の表情を、少しの間見つめた後、語った。

「信一くん、私は用事があるので、この交差点を渡るわ——それではね」

そう言って、彼女は足早に交差点を渡っていった。

信一は、この時の由美の後ろ姿が、まるで向こう岸に渡っていく姿に見えた。

——振り向き、麻理子を見た。彼女は、うつむき言葉を発する様子がない。

「麻理子、会社に帰ろう」

「そ、そうですね——帰る所に帰りましょう」

会社に帰る途中、信一が話しかけても麻理子から応答は僅かしかない。会社についても、彼女は彼とほとんど話しをしようとしなかった。

信一は、彼女の心中がわからないまま、その日は会社から真っ直ぐ自分のアパートに帰ったのだった。

翌日、出勤した信一は、早速、麻理子の顔を見た。

彼女は何故か信一と目を合わさず仕事に取り組んでいる。

——彼女の心がわからない。昨日、由美と偶然会った時に麻理子は何を感じたのだろうか。

その日の残務処理が終わった信一は、追いかけるように麻理子のアパートに直行した。

彼女の部屋に入った信一は麻理子の顔を見た。——彼女は信一の目を見ようとはしない。

彼は、聞いてみた。

「麻理子、いったいどうしたのだ」

「————」

麻理子が静かに語り出した。

「信一さん、将来、北海道に帰るのですか」

「——それは、まだ決めていないのだ」

「もし、帰るつもりであるなら、私と別れて下さい。——私、一人娘だし、将来、両親の面倒を見なければならぬのです」

信一は、今の彼女の言葉の中には、他にも何かがあると直感した。

彼は麻理子の手を握り、もう一度聞いた。

「麻理子、本当の事を教えてくれ」

彼女は、やっと顔を上げ語り出した。

「信一さん、私、昨日、信一さんが幼馴染みの人と話している姿を見て、信一さんの故郷の香りを強く感じたのです」

「それは同じ郷里の人間だもの仕方ないではないのか」

「いいえ、それだけではないのです。信一さんとあの女性との間には、私にはどうしても入り込めないものがあるのが胸の中で膨れ上がってくるのを止められないのです」

「—————」

「信一さん、それに——私、以前に、見てしまっていたのです。信一さんのアパートの部屋の机の一番上の引き出しの中に写真があり、信一さんが、私に見せた事のないような明るい表情で隣の女性と写っているのを——そして、その人がまさしく昨日会った、あの人だったのです」

——強烈なとどめとも言える言葉だった。

信一は、真田範子が撮った、由美と一緒に写った写真を大事に机の引き出しに保存していたのだ。それを麻理子に見られていたとは。しかも、その由美と昨日、麻理子の前で会い、会話を交わしたのだ。麻理子の心の中が明確に見えてしまった。

同時に、彼の心の中で気になっていた、あるものを、麻理子に見抜かれてしまった事を悟った。

長年に渡り、自分の心の中から離れず、消し去ろうとしても消えないもの。

——自分が本当に好きなのは松永由美なのだ。

麻理子は、女の直感で気がついたのだろう。

信一は、麻理子に言葉を返せなかった。

「麻理子、とりあえず今日は帰るよ」と言い、彼女の部屋から出るしか信一には思いつかなかったのだった。

それから半月後、麻理子が突然、会社を休んだ。周りの同僚は理由がわからないと言う。

信一が電話しても応答がない。

——いったいどうしたのだ。

彼は不惑の気持ちで勤務についていた。

その日の勤務が終わり、早速、彼女のアパートに足を運んだ。

窓から見える部屋は暗い。合鍵でドアを開け、中に入った。

部屋の電気をつけた。

人の気配がない。

彼女にまた電話してみたが応答がない。

信一は、テーブルの上に地図帳があるのに気がついた。

彼は不思議に思い、地図帳を開いてみた。

——日本地図のページ。

彼は、そのページに目が貼り付いた。

そこには、信一にとって大きな落胆のメッセージがあったのだ。

日本地図から信一の故郷の地域の部分に麻理子の字で小さなメモがテープで止められていた。

「信一さん、ご免なさい。いろいろと考えたけれど●印なの」という内容のメモが——。

彼は、男として、もう麻理子を追う事は出来ない。と深く実感するしかなかったのだ。信一は、小さなメモを書いた。そして、地図の麻理子の故郷の部分にテープで貼った。

「仕方がないね」と書いたメモを——。

翌日、彼は、会社で部長の山本から、麻理子が既に辞表を提出していた事を聞いた。

山本は、「紺谷くん、私は深くは聞かない。男と女の関係というものは、ある日、突然、沸き上がる事もあれば、消滅するのも早いものだ。私の経験から述べさせてもらおうと、交際を始めるまでに性急に進んだ恋は危険なのだ。むしろ、ゆっくりと大地を踏みしめるように進み、相手が自分にとって最高の存在である。という事に気がついた恋が長く続く本当のものだと思っているのだがな——」

信一は、山本に深く頭を下げた。

山本も、それ以上は語らなかつた。

それから三ヶ月後、あの森田竜司から電話があった。

「久しぶりだな、信一、元気であるか」

「森田、懐かしいなあ、俺も元気だぜ——一応だけれどな」

「一応？ なるほどな」

「なるほどな。とはどういう事なのだ？」

「何だ、お前、知らなかったのか。由美が結婚するらしいぞ。学生時代の途中から交際していた相手とな」

「————」

信一は、覚悟はしていたとは言え、知りたくない事実をついに聞いてしまった。

最後通告とも言える衝撃が脳裡を走る。

森田は語り続ける。

「俺も正直言って落胆したがな。これも仕方がないと思うしかないものな。信一よ、お前の心中は親友である俺がわからないでもない。でも、お前も心に区切りをつけ、新しい気持ちで自分の道を切り開いていくのだな。お互いにこれから頑張ろうぜ」

「——ま、まあ、そうだな。自分の道を決めるのは、最後は自分だものな」

森田との電話が切れた後、信一の心は、都会の雑踏が、耐えきれぬ重みに感じていたのだった。

月日は経過する。

麻理子、そして由美。自分の心を揺さぶった二人の女性を失った信一の心の空虚感は隠せない。心の中の大事な回路が切れ、それを気力で修復しようにも、どうしてもできないのだ。

やがて、彼は、自分の心に起死回生を期待し、ある決心をする事となる。

——故郷に帰ろう。麻理子と由美のいる東京から離れ、彼女達の面影を早く忘れたい。

故郷に帰り人生を歩むというものなら、両親も喜ぶ。そして、自分自身でも新たな希望の持てるものとなるはずだ。

二ヶ月後、信一は山本部長に辞表を提出する事となる。

理由は、故郷に帰り、家業の跡継ぎをする。というものだった。

山本は、「やはり、そういう決断をしたか。いいだろう。君の心中を詳しくは聞かない。

私と言える事は、この会社で働き身につけたものを故郷で存分に発揮し、これからの人生を、君自身の力で切り開いていくのだよ」と言い、信一の両肩を強く握った。

信一は、また山本に深々と頭を下げたのだった。

故郷に向かう飛行機の窓から都会の灯りを見つめ、そこで生活している、橋田麻理子と松永由美。二人の女性の姿が信一の網膜に映り続けていた。

紺谷信一の、故郷に帰った新しい生活が始まった。

家業に従事した生活を送りながら、様々な人々と再会する。

近所の人々や都会に出ず田舎に残り生活を続けている友人達の嬉しい声が数多く聞こえる。そして、故郷では、都会と異なり、総人口は少なくとも、出会う人達の中で知り合いが圧倒的に多いのだ。

信一は、故郷に帰ってきた事に対する不安も月日が経過するに伴い和らいでいた。

だが、反面、都会で修行してきた彼にとって、故郷とはいっても、周囲は今度は子供とは見ず、田舎のしきたりと世間の狭さに困惑する場面も多かった。

信一は、田舎の良い面と辛い面を深く感じる日々にも突入していた。

同じ故郷でも立場が変われば、こんなに厳しいものなのか。と何度も痛感し、都会であるまま暮らしていれば良かったと思った時も多かった。しかし、生まれ故郷に帰ってきたからには、もう後戻りは出来ない。——彼は、辛いことがある度に、自分に何度も言い聞かせていたのだった。

信一の故郷での生活は、着実に時を刻み続けていた。

彼の結婚相手として、お見合いの話や、友人から相手となる人物を紹介されたりもした。

だが、彼にとって、心の扉を開けた女性は、由美と麻理子しかいない。

——果たして、新たな女性が現れるのだろうか。このままではいけない——だが、由美や麻理子に抱いた特別な感情が湧く相手が見つからず、独りで困惑する日々が続いていた。

信一が故郷に帰り、二年半ほど経ったある日。

あの真田範子から電話がきた。

「お久しぶり、紺谷くん」

「懐かしいね、真田さん。あっ、もう真田ではないのなものな」

「そうよ、私は、真田ではなく、道下範子という名になったのよ」

「そうだったね、ご免」

「うふふ、でも、旧友の紺谷くんなら真田と呼ばれる方が嬉しいものなのよ」

「幼馴染みというと、皆、子供の頃から知っているから、旧姓で呼ぶ方が自然に感じるものなものな」

「ところで、紺谷くん、聞いている？」

「えっ、何のこと？」

「由美ちゃんね、実はまだ、松永由美なのだって」

「————」

「理由はよくわからないのだけれど、彼女、婚約した相手と結婚していないみたいなの」

「————」

信一は、言葉を失った。

「その内、何かわかるかもしれないわね。もしわかったら教えてね」

————。

電話は終わった。

信一の脳裡は錯乱に近いものとなっていた。

——由美、何があったのだ。

季節は夏となっていた。

北国でも暑さを感じる日だった。街ではお祭りが始まっている。

信一は、いつものように仕事で車に乗り外出していた。

そして、あの神社坂の下を通り過ぎようとしていた時、——彼は目を疑った。

夏の日差しの中、坂の途中で立ち止まっている女性の姿。

忘れるはずがない。人違いのはずがない——由美だ！

彼は、車を急停車させ、ドアから飛び出し、鍵もかけずに、走り寄って行った。

由美のいる地点まで、信一は駆け上がった。

彼女も気がついたらしく、振り返った——自分の顔を見て驚いた様子だ。

信一は、周囲の歩く人々の視線など気にもかけず、大声を發した。

——「由美！」

彼女は、信一の姿を凝視したまま動かない。

彼は彼女の目の前まで来た。

信一は、無心で由美の両肩に手をかけた。

「由美、いったいどうしたのだ」

「————」

彼女はうつむき無言だ。信一は、少し冷静さを取り戻した。

「噂は耳にしている。旧友の立場としても話を聞きたい——」

彼女は顔を上げた。そして、少しの間、信一の顔をじっと見つめ口を開いた。

「し、信一くん、話を聞いたのね。今、詳しくは言えないのだけれど、もし宜しければ、ゆっくりと話がしたいわ——」

信一は、由美の肩を掴んだ手から力を抜いた。そして応えた。

「できれば、今夜にでも、坂の下の喫茶店で会いたいのだが——」

「——信一くん、今夜八時なら遅いかしら」

「何時でも構わない。是非、会おう」

二人は、互いに見つめ合いながら、その場を離れた。

信一は、その日の仕事に従事しながら、ひたすら夜を待った。

時間の流れがとても遅い。

由美と待ち合わせの時間がやっと近づいたのを確認し、信一は喫茶店に向かった。

店のドアを開けた。彼の目は一点に集中する。

由美は既に来ていたのだ。

彼女は、信一の顔を見て、小さく手を振った。信一も小さく手を振った。

テーブルをはさんで由美と向かい合う。

信一は、彼女の近況に疑問を抱きながらも、由美と二人だけの空間が無性に嬉しかった。

しかし、今は、話しをしなければならぬ事がある。

「由美、いったい何があったのだ」

—————。

彼女は静かに語り出した。

「私、相手の人から、大学に入学した頃から交際を求められていたのです。でも、正直言って、どうしても彼を好きだという感情が湧かなくて思い悩んでいました。——あの学生時代の夏の日、神社坂で信一くんに会った時、『また会いましょうね』と言いました。あの言葉の中には、そのような私を信一くんの手を引かれて受けとめてもらいたかったの。——その後、私は、その相手の強引さに、ついに交際する事となり、社会人となってからも交際は続いていたのです。

その内、彼から求婚され、また思い悩んでいました。——更に、私は信一くんが別の女性と共に腕を組み寄り添いながら歩く姿まで見てしまい、ふと彼の要求を承諾する決心をしてしまったのです」

信一は、由美の言葉の一つひとつに胸がえぐられていく想いで聞いていた。
——自分は、彼女に対して、何も出来ない男だったのだ。

由美は語り続ける。

「私は、婚約してからも都会での生活を送っていました。でも内心、思い悩む日々が以前として続いていたのです——これで本当によいのかしら。という気持ちが、どうしても消えなかったのです」

そして、由美は、ハンドバックを開けて、中に手を入れた。

彼女がハンドバックから取り出したもの——それは、何と、あの夏の日、真田範子が撮った、信一と由美と一緒に写っている写真だったのだ。

信一は、また目を疑った——自分が大事に保存していた二人で写った写真を彼女も保存していたとは。

「ゆ、由美、どうしてそれを——」

「彼は、私と婚約してから、私の本当の心が自分に向けられていない。という事に気がついたので。そして、彼は彼で思い悩み、具体的な挙式の話を進ませませんでした。そのようなある日、化粧棚の一番上の引き出しに保存していた、この写真を彼に見られてしまったのです。

彼は言いました。『お前が自分に向けたことのない、心の底から明るい表情がこの写真の中にある』と——。その後の私達は、お互いの心に相通じるものがまったくなくなりました。そして、半年前、ついに別れる事となり、私は実家のある故郷に帰ってきていたのです。別れる時に彼が言ったのは、『仕方がない』という言葉でした」

信一は、驚愕の心境が治まらない——由美も自分と同じような場面を経験していたとは。

彼は、写真を持つ彼女の右手に手を触れ話した。

「由美、君の話は確かに聞いた。俺も考えている事がある。もしよければ、明日、またここで会おう」

由美は、「は、はい、信一くんがよければ、明日また——」と応えた。

翌日、同じ場所、同じ時間に二人は待ち合わせた。

信一が店のドアを開けると、今日は自分の方が早いようだった。

まもなく由美が入ってきて、昨日と同じように、お互い、小さく手を振り同じ席に座った。

「由美、昨日は久しぶりに、二人でゆっくりと話ができだね」

「そ、そうね。あまり良い知らせではなかったけれど——」

信一は、胸ポケットに手を入れ、そして差し出した——自分が持っていた由美と二人で写った写真を。

今度は、彼女が驚愕の表情となった。

「し、信一くん、どうしてこの写真を——」

「範子から同じものをもらっていたのだよ。そして、この写真を自分も大事に保存していたのだ。ところが、東京で交際していた、あの彼女に見られてしまっただけ。結局、それがとどめのようなものとなり、彼女と別れる事となり、自分も故郷に帰ってきた訳なのだ。お互い、とても共通しているようだね」

「—————」

由美は何も語らない。

信一は、彼女の右手を握り語った。

「由美、この写真の中の俺達の気持ちが、もし、今も変わらないものであれば、明日、お祭りの最終日、また同じ時間に、神社坂のお社に登る階段の下で会いたい」

由美は、うつむきながら静かに応えた。

「そ、そうですね、明日また、神社の石段の下で——」

そして翌日、夜八時。

信一は、神社の横にある駐車場に車を駐めた。

今日は、ほぼ同時に、由美も車に乗ってやってきた。

二人は神社の石段の下に立った。

信一は由美の左手に自分の右手を近づけ手を掴み、共に石段を登り始めた。

「由美、こうしていると、まるで手をつないだ子供のようなだね」

「そうね、私達、この街で生まれ、小さい頃からの知り合いだものね」

石段を二人は登る——一步——一步。

「由美、この神社の石段は、下の神社坂の道とは違うのだよ」

「—————」 彼女はうつむく。

「俺は、神社坂は人生の歩みの坂道だと考えている。そして、今、一緒に登っている石段は、俺達の心の歩みなのだよ」

「—————」 由美は、無言のままだった。

—————。—————。

やがて、二人は石段を登りきり、お社の前まで来ていた。

信一は、つないでいた手を離し、鈴を鳴らしお参りをした。

由美も、鈴を鳴らしお参りをしている。

お参りが終わり、二人は見つめ合った。

彼は思いきって話した。

「由美、今まで、お互い勇気がなく心を語り合えなかったが故に、歩みに時間がかかった俺達だ。だが、短期間での感情の盛り上がりや、押しまくられたり、周囲の状況に妥協したものではなく、長い時間をかけ、自分達にとって最も大切な存在を、俺達はやっと見出す事が出来たのだ」

「—————」

由美は、少し間をおいた。そして応えた。

「——信一くん、今、お参りした時、何を願ったの」

「——もしかして同じ事かもしれない」

祭りの花火の明かりに映し出された由美の表情が輝きを発するようにとっても眩しくなる。

信一は、由美の左の頬に手をあてた——彼女の目も輝く。

そして、由美の唇に自分の唇をそっと近づけた——彼女は両腕を、彼の背中にまわし、

他に誰もいない夜の神社の境内で、信一と由美は固く抱きしめ合ったのだった。

二年後。

信一と由美は夫婦となっており、子供も生まれていた。

寝室には、二人の運命を呼び戻す大きな要因となった二枚の共通の写真が、重ね合わさ
れて一つの額に入り、「一枚の写真」となって飾られていた。

＊

夏祭りの日の午後、一組の老夫婦は、神社の石段の中間点にあるベンチに座っていた。

夫は立ち上がり、妻の手を引いた。妻も立ち上がった。

夫は語った。「由美、今、何を思い出していたのだ」

妻は答えた。「あなたと同じ事よ。長い年月、一緒にいると、お互いの心中はわかるも
のなのよ」

二人は、残りの石段を登った。

今度は、妻の方から夫の腕をつかみ、自分の腕を絡み合わせてきた。

老いた二人は腕を組み、寄り添いながら石段を登った。

また別の若いカップルが、石段を下りてきた。

だが今度は、老夫婦は腕を組んだまま離れなかった。

由美が語った。

「今、この石段の上半分を歩いていると、思い出すわね——」

二人は、結婚した後、この石段を登った場面を思い浮かべていた。

_____。

娘は小学生、親子三人で神社坂を登った。

「パパとママ、手を引っ張って」。可愛い娘の声。

お互い、「パパとママ」と呼ばれる幸せ。二人は、娘の歩く歩幅に合わせ、坂を登った。

お正月、娘の大学受験の合格祈願の為、二人は神社坂を登った。

娘が合格すると自分達の手から離れていくのだ。

合格の期待の祈願と、反面、寂しさを伴いながら、二人は坂を登った。

娘は大人の女性となり、嫁ぎ、若夫婦で家に訪れ、二人は初孫を抱いて神社坂を登った。

そして、「自分達は、まだ老いてはいない」と心に言い聞かせ坂を登り続けた。

夏が過ぎ秋風が肌にしみ込み始めていた。

孫は小学生。「おじいちゃんとおばあちゃん、一緒に神社に行こう」

二人は、孫と手をつなぎ神社坂を登った。

「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばれる感覚。嬉しさと寂しさが交錯する。

既に坂の頂上が近い事が予感された。

まだ二人は神社坂を登り続けていた。

そして、お社の前に辿り着き、共に鈴を鳴らした。

振り返り、坂から見える港を見つめた。

信一は由美の手を握り語った。

「俺のような男と歩んできてよかったのか」

「勿論よ。私達、この坂をはずれかけた時期もあったけれど、あなたと歩み続けて来た事に後悔していないわよ」

「ありがとう」

この時、信一は、由美の表情が、今までで最も輝いて見えた。

花火大会の開催を告げる最初の花火が上がり、二人の耳に深く鳴り響いた。